

教科領域の学習を命の視点でつなぎ、生命尊重の意識を高める指導

倉敷市立穂井田小学校 教諭
中塚晃典

研究の概要

本研究では、児童の生命尊重の意識を高め、命を大切にする意識を日常に生かすための指導方法を探った。その結果、児童の発達段階に応じた命の視点で教科領域の学習をつなぎ、学習内容を深めることにより、児童が生命尊重の意識を継続し、自らの日常の生活を見直すことができるようになるという手ごたえを得た。第4学年での学習プランを提案し、一実践を報告する。

キーワード 人権教育、生命尊重、命の学習、年間指導計画

I 主題設定の理由

今社会では、命を軽視していると思われる事件・事故や自殺が多発している。社会が大きく変化し、子どもを取り巻く環境が変わり命に対する感じ方や考え方も変化している。その中で、学校教育では生命尊重の教育を一層充実させる必要がある。文部科学省の「児童生徒の問題行動対策重点プログラム（最終まとめ）」（平成16年10月）では、重点を置く施策に「命を大切にする教育の充実」を挙げている。その中には、命を大切にする心を育むため教育課程全体を通じて生命を尊重する教育を推進する必要性が指摘されている。「人権教育の指導方法等の在り方について〔第二次とりまとめ〕」（平成18年1月 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議）の「人権教育の目標について」の中では、「自分の大切さと共に他の人の大切さを認めること」の重要性と、取り組みについての方針が述べられている。

また、「岡山県人権教育推進プラン」（平成19年2月 岡山県教育委員会）では、かけがえのない自他の生命を尊重する態度等を育てる取り組みを進めることの重要性が述べられている。人権教育を進める上でも生命尊重の意識を高めることは重要である。

本校でも日常生活において、危険な行動を平気でとったり、不注意からけがをしたりする児童がいる。また、友達とのちょっとしたトラブルで相手を叩くなどの行動が見られたり、きつい言葉を言ったりしている状況があり、生命尊重の教育の充実が課題となっている。人を思いやる行動を考えるなどの人権に関する知的理解を深め、人権感覚を高めていく中で、自他の命を大切にし、生活に生かすことができる児童を育てたいと考える。

従来の生命尊重の学習は、道徳や総合的な学習の時間などでの取り組みが多く報告されている。その成果を上げている一方で、特別な単元を組んだり、外部講師を迎えたりする取り組みには、一時的な取り組みになりやすいという課題がある。授業時間数の確保や学校行事の計画の見直しなどの準備が必要で、回数を重ねることは難しい。また、授業後しばらくは、児童の生命尊重の意識に高まりはあるが、その意識は継続されにくい。生命尊重の意識が継続するような取り組みをするには、校内研究などの体制が整っていなければ現実的に難しい面も見られる。

日ごろの学習活動の中で、児童の生命尊重の意識を継続し高める取り組みにしていくには、教科領域の学習内容を生命尊重の観点で、効果的に関連付けることが大切であると考え、6年間の学習内容を積み上げながら関連付けたり、学年での教科領域の学習内容を関連付けたりすることで、継続した取り組みにすることができる。

このようなことから、教科領域の学習内容を生命尊重の観点で結び付けることで、児童の生命尊重の意識を継続して高め、日常生活に生かすための指導方法を探ることにした。

II 研究の目的

教科領域の学習内容を生命尊重の観点で結び付けることで、児童の生命尊重の意識を継続して高め、日常の生活に生かすための指導方法を探る。

Ⅲ 研究の内容

1 研究の構想

現在取り組まれている教科領域の学習を生命尊重の観点から見直してみると、命の大切さを学習できる内容が多く含まれている。しかし、児童はそれらを教科の学習内容としか認識できていない。日常の多くの授業で、児童が命の大切さに気づき、大切にしようという気持ちを持つことができるならば、生命尊重の意識を継続し、高めることができると考える。

生命尊重の意識は発達段階に密接に関連している。6年間を考えると、身近なものや直接的な体験を通して命は大切と感ずることができるようになる低学年から、知識や過去の経験を通して、広く社会の中で命は大切ととらえることができるようになる高学年まで発達の違いは幅広い。生命尊重の意識を高める指導には発達段階に応じた配慮が必要であることは、多くの研究者が述べている。各学年に配当された教科領域の学習内容を生かすことで、発達段階に応じた生命尊重の意識を継続し高める系統的な指導ができると考える。

先行研究の中で、児童が命の大切さを感じるためには、命を多面的・実感的にとらえることが重要であると述べられている。より多くの教科領域の学習で命の大切さに気付くことができるようにするために、命を多面的にとらえるための工夫が必要であると考えた。命の多面性を構成する要素は、「だから命は大切である」と児童が気付くための視点となる。

本研究では、児童自身が命を多面的にとらえることができるように「命の視点」を持つことが有効ではないかと考えた。教科領域の学習の中で児童が命の大切さに気付く指導をするために、教科領域の題材や単元を整理し、発達段階に応じて適切な命の視点を設定する。児童が命の視点を持つことで、命の視点を通して教科領域の学習を命の学習としてつなぐことができる。命の視点から学習内容をとらえ直したり、深め合ったりすることで、命を継続的に大切なものと感じたり、多面的にとらえたりすることができる。そして、命の視点で生活を見直し、自他の命を大切にしている行動を考えることで日常生活に生かすことができると考えた。

(1) 命の視点の設定

簡単に身近な言葉で命の多面性を表すことで、児童が命の多面性をとらえやすくなるのではないかと考えた。

命の多面性を構成する要素の分類は研究者によって異なるが、分類の傾向には共通するものがある。ここでは、高村ら(2006)の「多面的な『いのち』のとらえ」の分類を参考にした。高村らは、命の大切さをとらえる多面性を七つに分けている。しかし、児童が教科領域の学習の中でつかむ要素としては表現も概念も難しい。そこで、それらを本校の児童に分かりやすい言葉で表現し、五つの命の視点に整理した(図1)。

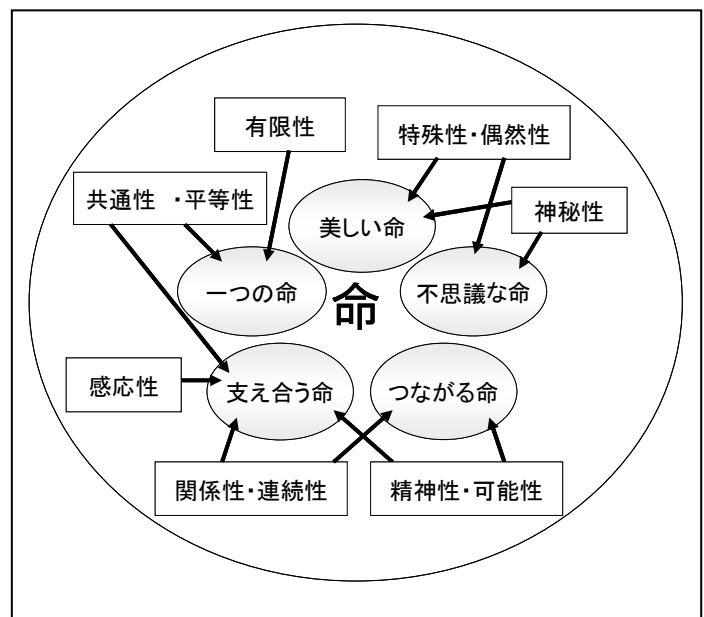


図1 命の視点

(「多面的な『いのち』のとらえ」: 高村ら(2006)を参考に作成)

(2) 各学年の命の視点

教科領域の単元や題材の中で児童が持つことができる多面性は、その発達段階

と教科における特質とも関係している。各学年の教育課程に沿って持ちたい命の視点を設定した(表1)。

低学年では、発達段階を考えると多くの視点を持つより、「一つの命」の視点を持ち、命の大切さに気付き、体験を通して学習を深めることが大切である。

第3学年では、新たに社会科などで家族や周りの人とのかかわりを学習し、「支え合う命」につながる「支えられる命(表1※)」の視点を持つことができる。

第4学年では、国語科や社会科で自らも家族や社会を支えることができることに気付き、「支え合う命」の視点を持つことができる。また、理科では植物が枯れて種子を残し、命を受け継ぐことを学び、「つながる命」の視点を持つことができる。

高学年では、それぞれの教科の学習内容が広がり、深まる中で「一つの命」「支え合う命」「つながる命」の視点で命に対する認識を深めるとともに、理科、保健で学ぶ生命の誕生や身体の仕組みから「美しい命」「不思議な命」の視点を持つことができる。

命の視点の名称については、児童が持つ命のイメージや発言により、児童が持ちやすいように実態に応じて表現を変えることが考えられる。

(3) 児童が命の視点を持ち、生活に生かす学習プラン

教科領域の学習をつなぐために、児童が命の視点を持ち、生活に生かす学習プランの基本となる学習の流れを図2のように設定した。

ア 教科領域の学習で、命の大切さを感じる、命の学習があることに気付く(図2①)

いろいろな学習を振り返ることで、教科領域の学習の中で、命について考え、命は大切であると感じた命の学習があったことに気付き、これからも命の学習がいろいろな教科の中にあるという見通しを持つことができるようにする。学年や児童の実態に応じて、時間や活動を工夫して取り組む。既習の内容を振り返り、命の視点に気付くようにするには1単位時間程度の取り組みになると考える。

イ 教科領域の学習で、命の視点を持つ(図2②)

発達段階に応じた命の視点を教科の学習を通して持つことができるようにする。特に新しい命の視点を持つには、授業の振り返りや、児童の意見交換の時間を確保することも必要であると考え。児童の実態に応じて1単位時間の取り組みと考える。

ウ 教科領域の学習で、命の視点から、学習内容を深める(図2③)

命の視点を通して、学習内容を振り返り、意見交換をする中で、学習内容を深めたり命の大切さについて感じたことを共有したりして、生命尊重の意識を高め、継続できるようにする。適切な学習の単元や題材の中で、振り返りや話し合いの時間を設定する。

エ 命の視点を通して、自他の命を大切に作る行動を考える(図2④)

命の視点を通して、生活の中の問題点やルールを見つめ直し、具体的な行動を考えるようにす

表1 各学年の命の視点

学年	1	2	3	4	5	6
一つの命	○	○	○	○	○	○
支え合う命			○※	○	○	○
つながる命				○	○	○
美しい命					○	○
不思議な命						○

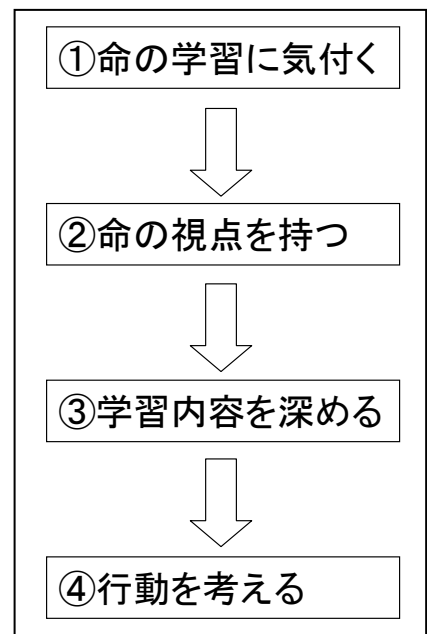



図2 学習の流れ

表2 第4学年 命の学習年間指導計画案

月	一つの命	支え合う命	つながる命
4	理科・あたたかくなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さに気付く。	国語・三つのお願い 自分がいて、友達がいるすばらしさを感じ共感する。友の存在を感じることで支えられる命に気付く。	※ 太枠、矢印で示したものが、それぞれの命の視点での学習プランである。 今回は、支え合う命の視点での学習プラン（  の部分）で実践を行った。
	社会・くらしとごみ ごみ処理の事業が、地域の人々の健康な生活を維持するために果たす役割から、支えられる命に気付く。	社会・いのちとくらしをささえる水 上水道事業が、地域の人々の健康な生活を維持するために果たす役割から、支えられる命に気付く。	
5	国語・「かむ」こと 健康を大切にす気持を持つ。自分の命を守ろうとする気持を持つ。	道徳・口で歩く人 親友の生き方に学び、生きるとはどういうことかを考える。	
	国語・「伝え合う」ということ 生活に目を向け、健康、食育に関することに興味を持ち、自他の一つの命を守ろうとする気持を持つ。役に立つことを人に伝える役割が大切なことを感じる。	理科・あつくなくなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを感じる。植物の栽培を通して、成長と世話をす喜び（失う悲しみ）を体感する。	
6	国語・「かむ」こと 健康を大切にす気持を持つ。自分の命を守ろうとする気持を持つ。	国語・「伝え合う」ということ 生活に目を向け、健康、食育に関することに興味を持ち、自他の一つの命を守ろうとする気持を持つ。役に立つことを人に伝える役割が大切なことを感じる。	
	理科・あつくなくなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを感じる。植物の栽培を通して、成長と世話をす喜び（失う悲しみ）を体感する。	社会・いのちとくらしをささえる水 上水道事業が、地域の人々の健康な生活を維持するために果たす役割から、支えられる命に気付く。	
学級活動・教科の中の命の学習（図2①） 教科領域の学習に生命尊重を感じる内容がたくさんあることに気付く。			
7	道徳・子牛が生まれた（図2②、③） 命を大切にすために気を付けていることを考える。		
	学級活動・もうすぐ夏休み（図2④） 命を守る生活の仕方を確認する。		
9	道徳・アゲハがたんじょうした 生き物の世話をしたときのことを振り返り、命の喜びや悲しみについて考える。	社会・なくそうこわい火事 自分達の生活、命が支えられていることを感じ、命を守る役割のついて考え、支え合う命の大切さに気付く。	
	国語・一つの花（図2②） 死につながる戦争、心を通わせる家族の気持ちと支え合って生きる母とゆみ子から、命の尊さや生きたいという気持ちを尊重する思いを持つ。		
10	理科・すずしくなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを感じる。植物の栽培を通して、成長と世話をす喜び（失う悲しみ）を体感する。	社会・ふせごう交通事故や盗難事件 自分達の生活、命が支えられていることを感じ、命を守る役割のついて考え、支え合う命の大切さに気付く。	
	道徳・シッコのちぎれたメダカ かけがえのない命に共感し、大切さを考える。		
11	社会・消防署見学（図2③） インタビューや見学を通して、一つの命の大切さとお互いの役割を果たすことで支え合う命の大切さに気付く。		
	国語・生活を見つめて 生活を見直すための身近な問題を見つけ、自他の一つの命を守ろうとする気持を持ち、互いの思いを伝え合うことの大切さに気付く。	社会・地域のはってんにつくした人々 過去の人々の努力によって現在の生活が成り立っていることに気付く、支え合う命の大切さに気付く。	
12	道徳・お母さんの足の親指 足の指にそっと触ったわたしの気持ちを想像し、母と父の命の存在を感じる。		
	理科・寒くなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを体感する。	学級活動・互いの命を大切にすルール（図2④） 自他の命を大切にす行動を考え、生活を振り返りめあてを持つ。	
1	理科・寒くなると 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを体感する。	国語・話し合って決めよう 自分たちができる役割について話し合うことで互いの役割、行動について考える。	理科・寒くなると（図2②） 枯れて種を残す植物から、命を受け継ぐ仕組みを学び、つながる命の大切さに気付く。
	保健・育ちゆくわたし からだの成長、心の変化について理解し、成長の喜びや期待を持ち命を大切にしようと感じる。（図2③）		
2	道徳・火の山のおじいさん 危険な登山をさせないおじいさんの強い気持ちから、支え合う命と一つの命の大切さについて考える。		理科・生き物の1年をふりかえって 成長し、次世代に命をつなぐ生きもの様子をとりえ、つながる命の大切さに気付く。
	理科・生き物の1年をふりかえって 動植物の観察を通して、季節に応じた命の成長とその尊さを体感する。		
3	国語・ごんぎつね 母の死やごんの死を通して、命の尊さや生きたいという気持ちを尊重する思いを持つ。		道徳・がんばれ カブトガニ カブトガニを守ろうとした人たちの気持ちや動物の命について考え、つながる命を守る大切さを考える。
	学級活動・5年生に向けて 自他の命を大切にす行動を考え、生活を振り返りめあてを持つ。（図2④）		

る。普段の生活の中で、命を大切にしようとする行動ができるように目標を設定するなど、必要に応じた学級活動などでの取り組みが考えられる。

2 第4学年での実践

近藤（2007）は、いのちの教育の実践を考える重要な発達の変換点として、10歳から12歳のころをあげている。死の概念がほぼ確立され、抽象的な思考ができるようになり、自分自身の存在の意義などについても考えをめぐらせるようになる時期であると述べている。

社会とのかかわりが広がり、新しい命の視点をとらえることができる学習機会が増える、第4学年での実践を行うことにした。

第4学年の教科領域の学習を「一つの命」「支え合う命」「つながる命」の三つの命の視点で「命の学習年間指導計画案」として整理した（表2）。併せて表2に、命の視点を持ち、生活に生かす学習の流れに沿った（図2）、三つの命の視点における各学習プランを示した。

(1) 実践に当たって

生命尊重の意識を高めるには、命を実感的にとらえることが必要である。生きるすばらしさや死の悲しみを体験を通して感じ、命の大切さに気付くようにするには、直接的に命にかかわる授業となる、理科や体育科の保健を中心に据えるクロスカリキュラムが考えられる。しかし、理科や保健の学習内容をつなぐだけでは意識の継続になりにくい。児童が命の視点を持つことで、多くの教科の特質をおさえた学習をしながら生命尊重の意識を高めることができれば、継続した取り組みが可能になると考える。

ここでは、命の視点を持ち、国語科や社会科の学習内容を深め、既習の内容や経験とつなぎ、生命尊重の意識を継続できるようにするために、道徳、学級活動の時間を活用し取り組むことにした。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、社会を見渡しての善悪の判断が付き始め、自分の行動を反省することができるようになってきている。また、相手のことを考えた行動もできるようになってきている。

児童13名に命に関する意識や学校での授業で命の大切さを感じているかなどの調査を行った。その結果、「命が大切だと思ったことはありますか」の質問には全員が「はい」と答えたが、今までの授業の中で命が大切だと感じたことがあると答えた児童は、3名だった。道徳の授業や国語で作文を書いたときというものであった。また、「どんなときに命は大切だと思いましたか」の質問には、「けがをしたとき」「事故に遭いそうになったとき」などの回答が得られた。

この調査からは、児童自身が教科の中に生命尊重にかかわる学習内容があることに気付いていないことが分かった。また、児童は命を大切だと思う要因を、命は一つであるという一面でしかとらえていないことが分かった。

これらのことから、本学級の実態に応じた「支え合う命」の視点を持つことができる学習プランの実践を行った。

(3) 「支え合う命」の学習プランの実践

「支え合う命」の視点を教科領域の中で児童が持ち、命の大切さに気付き、生活を振り返って互いの命を大切にするための行動を考える取り組みを実践する。

実践に当たり、単元を振り返ったり、話し合ったりする時間を1単位時間に設定し、道徳、学級活動の時間を有効に活用することを考えた。そして、次の4回の授業を実施した。

対象児童：倉敷市立穂井田小学校 第4学年 13名

ア 学級活動「授業の中の命の学習」（実施日：平成19年7月13日）（図2①）（表3）

イ 道徳「一つの花」（実施日：平成19年11月1日）（図2②）（表4）

ウ 道徳「消防士さんの気持ち」（実施日：平成19年11月12日）（図2③）（表5）

エ 学級活動「互いの命を大切に作るルール作り」（実施日：平成19年11月19日）（図2④）（表6）

表3 学級活動「授業の中の命の学習」の取り組み

目標	教科の授業の中に生命尊重を感じる内容がたくさんあることに気づき、「一つの命」の視点を持つことで命を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。	
	主な学習活動	児童の様子
	<ol style="list-style-type: none"> 「いのち」と聞いて思い浮かぶことを挙げる。 理科や国語などで学習したことや今までの道徳や学活で学習した命の通じる学習を思い出し、発表する。 教科領域での学習と命について感じたことを考える。 気付いたことや感じたことを書く。 	<p>児童は、「いのち」から、大切・大事、死ぬ、一つ、家族、友達などを連想した。</p> <p>「命あるのは、人間だけじゃない」と気付いた児童は、理科や生活科の動植物に関する学習を思い出すことができ、「一つの命」の視点に関連する学習をたくさん挙げた。</p>
<p><結果・考察> 児童のワークシートの記述から、命は大切なものという意識は高いこと、命に関連する学習にたくさん取り組んできていることに多くの児童が気付いたことがうかがえた。</p> <p>教科書をめぐりながら命に通じる学習を思い出す活動の中で、これから学習する理科、社会の単元にも生命尊重に関する学習内容があることに気付いた児童がいた。児童は、死に関する内容を含む国語の題材や生活科や理科の昆虫を飼ったり植物を育てたりした学習経験を「命は一つしかない、だから大切だ」という命に対する児童のとらえ方とつないだことで、目標であった「一つの命」の視点を持つことができた。</p>		

表4 道徳「一つの花」の取り組み

主題	生命尊重（3-2）	資料	一つの花（国語教科書）
目標	国語「一つの花」を振り返り、「一つの命」、「支え合う命」の視点で、物語をとらえることができるようにし、二つの視点を持って命の大切さを感じるができるようにする。		
他教科との関連等	教科の学習で生命尊重の内容を含む単元の一つである。併せて、社会「安全な暮らしを守る」を同時期に進めているので、命の視点で教科領域の学習をつなぐことができるようにする。		
	主な学習活動	児童の様子	
	<ol style="list-style-type: none"> 国語「一つの花」の中で、命を感じた場面を振り返る。 振り返ったことを出し合って、3～4名の小グループで話し合う。 発表したことをまとめながら、「一つの命」の視点と共に、「支え合う命」の視点で、家族、親子の関係を考える。 他の教科でも命の学習があることに気付く。 	<p>児童は、改めて教科書を読み、命の大切さを感じる場面の記述を挙げた。多くの児童は、戦争の場面描写や食料についての記述で命の学習をしたと答えた。互いに生きて欲しいという母と父の思い、父がゆみ子を大切に思う気持ちや母とゆみ子が貧しいかもしれないが戦争のない平和な時代を支え合って生きている様子の部分で、命の大切さを感じた発言をした児童がいた。</p>	
<p><結果・考察> 児童は、事前のアンケートで国語「一つの花」で命の学習をしたと感じたと答えている。</p> <p>授業の感想の記述から、児童は、戦争に関する場面を強くとらえており「一つの命」の視点では、ほぼ全員が命の大切さを感じる学習であったととらえている。この教材では、児童が親子の関係をとらえた「支え合う命」の視点を持つことができると考えていた。「支え合う命」を感じる発言はあったが、親子のかかわりを描写した場面での振り返りが十分でなかったため、大切な家族の命に着目できるようにすることができなかつた。そのため、「支え合う命」の視点でとらえることができた児童は少なかった。本教材では国語本来の授業の展開との関連を図ることで、「支え合う命」の視点でとらえることができるようにしていくことが必要であると感じた。</p>			

表5 道徳「消防士さんの気持ち」の取り組み

主題	生命尊重（3-2）	資料	消防士さんの思い（第4学年 社会「安全な暮らしを守る」、消防署見学）
目標	<ul style="list-style-type: none"> 命を守ることに對して、多くの人が協力し信頼し合って取り組んでいる様子を通して、「支え合う命」の視点をとらえ、命を守ろうという気持ちを持つことができるようにする。 消防士さんの思いを通して、想像以上の努力や工夫をしてまで守るべき価値がある人の命について考え、命の大切さを感じるができるようにする。 		
他教科との関連等	教科の学習で生命尊重の内容を含む単元の一つである。併せて、国語「一つの花」を同時期に進めているので、命の視点で教科領域の学習をつなぐことができるようにする。		
	主な学習活動	児童の様子	
	1 消防署の見学を振り返って、インタビューや見学して	児童は、授業で調べたことや、見学のメモを振り返り、	

感じたことを発表し、話し合う。 2 消防士さんの言葉から命について考える。 3 互いを支え合う消防士の様子について考える。 4 消防署の他の場面でも命を大切にするために互いが協力し合い、支え合っている姿について考える。 5 気付いたことや感じたことを書く。	授業や見学で印象に残ったことを多く発表した。ほとんどの児童が、「命を大切に思っている」「人のためになることがしたい」という消防士の気持ちをワークシートに記述したり、発表したりした。 本部で情報を受けたり、指令を出したりする人みんなが協力し合っている様子に着目した発言があった。
<結果・考察> 多くの児童が消防署見学を通して、チームワーク、役割という「支え合う命」の視点につながる言葉をつかんでいた。見学の中の消防士の訓練の様子をとらえ、消防士同士の互いの命を守り合うための役割について、具体的な行動と結び付けた解説があったことで、役割を果たすことが人が人やチームみんなの命を守ることになり、命を支えているということに多くの児童が気付いた。児童の記述から、助けられる人の命に注目した児童が、「一つの命」を強くとらえ離れることができななかったが、多くの児童は、「支え合う命」の視点を併せて持つことができた。	

表6 学級活動「互いの命を大切にせるルール作り」の取り組み

目標	<ul style="list-style-type: none"> 自分の命や友達の命を大切にすることは、どうすることかを考えることで、命を大切にしようという気持ちを持つことができるようにする。 命を大切にせるルールを具体的な場面をとらえて話し合い、ルールを決める活動を通して、自分や友達の命を大切にせる生活をしようという気持ちを持つことができるようにする。 			
	主な学習活動	児童の様子		
	1 日ごろの係活動を考える。 2 互いの命を大切にせるルールについて考える。 3 それぞれの時間で、自分にできる役割を考える。 ・遊び時間、授業中、掃除時間、給食時間、休憩時間等 4 今日の学習を振り返る。	係活動を身近な役割としてとらえた児童は、係活動が互いを支え合う活動であると気付き、支え合うことを意識して周りの人の命を大切にせる行動を考えた。様々な場面の役割を出し合うことで、児童は、自分の考えた行動を目標に取り入れた。		
	<結果・考察> 児童が設定した各活動での生活目標をまとめた。			
	授業では	掃除時間では	給食時間では	休憩時間では
	<ul style="list-style-type: none"> まちがえてもわらわない 人の意見をきく 友達がわからなくてもばかにしない 人の考えをばかにしない 人の話を聞く 人の説明にはもんくをつけない 人がきずつくことを言わない 	<ul style="list-style-type: none"> いっしょうけんめいにする 静かにする きれいにする みんなをすっきりさせる まどをあけたりする みんなのためにきれいにする 教室をびかびかにする 	<ul style="list-style-type: none"> 走らない あばれない すわっておく 当番をきちんとする ご飯をつぐ役割をがんばる みんなで力を合わせる さわがない 	<ul style="list-style-type: none"> 他の人にめいわくがかからないようにする 仲間はずれにしない いじめない ルールを守る ちゃんと低学年の子と遊ぶ 自分もみんなも楽しくなるようにいっしょに遊ぶ ゆずる 転んでしまった人がいたらたすけてあげる けんかをしない
	<p>「支え合う命」の視点を持ち深める学習の中で、チームワーク、役割をとらえた児童が「支え合う命」の視点を持つことができたことから、自分の役割を考えることで「支え合う命」の視点で生活を振り返ることができると考えた。多くの児童が、みんなのためになり、自分にとってもよいという気持ちで目標を設定している。</p> <p>本時の「行動を考える」「ルール（目標）を決める」「生活しようとする気持ちを持つ」に、「支え合う命」の視点を判断の視点として生かすことができたと思える。</p> <p>児童が設定した目標は、学級活動で取り組まれている「よりよい生活のために」の目標と重なることが多い。併せて考えることができれば、よりよい生活とは、命を大切にせることであると児童が容易に結び付けることができるのではないかと考える。身近なルールが、命を大切にせるためのものであることが理解できれば、ルールを守ろうという気持ちや態度を育てることもつながる。「一つの命」の視点だけでは自分中心になることが考えられるが、「支え合う命」の視点を持つことで、自他を意識した命を大切にせる目標を設定することができた。命の視点で生活を振り返るきっかけとすることができた。</p>			

(4) 実践を終えて

「学習の流れ（図2）」に沿った学習プランで、「支え合う命」の視点を持ち、生命尊重の意識を継続し高めるための児童の思考の流れを作ることができたと考える。さらに、他の単元や題材において短時間でも、命の視点を通して学習を振り返ったり話し合ったりして学習内容を深め、命の大切さを友達と共感することができるようにすることで、生命尊重の意識を継続し高めることができると考える。

学級活動「教科の中の命の学習」については、高学年であればもっと早い時期に取り組み、生命尊重に関する学習内容に気付くようにすることが効果的であると考ええる。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

年間指導計画の見直しや題材や単元の検討から、教科領域の学習の中でとらえることができる命の多面性を命の視点として整理することができた。命の視点を持つことで、教科領域の学習の中で、6年間の学習を積み上げることができ、各学年でも、学習の流れに沿って教科領域の学習をつないでいくことができるという手ごたえを得ることができた。特別な取り組みをしなくても、教科領域の学習で命の視点を持ち、授業を見つめ直すことで、児童が命の大切さに気付き、生命尊重の意識を高める機会が、十分にあり得ると言える。

第4学年では、児童が教科領域の学習の中で「支え合う命」の視点を持つことで、他者の命を大切にすることを意識して、生活の改善を考えるきっかけとすることができたと考える。命の視点を児童が持つことで、教科領域の学習を命の学習としてつなぎ、日常生活を見直すことができるようになると期待できる。

2 今後の課題

個人の中に持つことができる表1に示した命の視点は、児童一人一人の生活経験によっても変わってくる。児童自身が持った命の視点については、表現の仕方も含めて柔軟に認めていくようにしたいと考える。

授業の仕方、実施の時期については、教科領域の年間指導計画や学校行事の計画に沿って、絶えず工夫をしていかなければならない。特に、新たな視点を持つための支援としての教材選択や授業展開、活動の設定には工夫が必要であると考ええる。「支え合う命」以外の、命の視点について、他学年での取り組みと合わせて、今後の研究の課題にしていきたいと考える。

設定した学習プランをきっかけとして、日常的な取り組みにしていくことでしっかりとした生命尊重の意識の高まりにつながっていくと考える。朝の会、帰りの会などの継続的な時間活用の工夫を併せて考えていきたい。

○参考文献

- ・ 近藤卓（2003）「いのちの教育」実業之日本社
- ・ 嶋野道弘ほか（2005）「生命尊重の心をはぐくむ」東洋館出版社
- ・ 高村恒子ほか（2006）『『いのち』を多面的・実感的にとらえる道徳教育をめざして』川崎市総合教育センター研究紀要第19号
- ・ 近藤卓（2007）「いのちの教育の理論と実践」金子書房
- ・ 全国教育研究所連盟編（2007）「学校力が上がる 教師力が伸びる」教育新聞社